

# カール・ツツクマイヤーの戯曲『ケーペニックの大尉』における副題「ドイツのメルヒェン」に込められた意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22206">http://hdl.handle.net/10291/22206</a>

# カール・ツックマイヤーの戯曲『ケーペニックの大尉』 における副題「ドイツのメルヒェン」に込められた意味

## Die Bedeutung vom Untertitel *Ein deutsches Märchen* in Carl Zuckmayers Drama *Der Hauptmann von Köpenick*

博士後期課程 独文学専攻 2017 年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

### 【要旨】

カール・ツックマイヤーは、大尉に扮した男が起こした 1906 年の事件を題材に戯曲『ケーペニックの大尉』を 1931 年に発表した。ヴィルヘルム二世の治世下で軍や軍服姿の人物に畏敬の念を抱く事件当時の大衆の姿と、1929 年に起きたニューヨークの株価大暴落の影響によりドイツで失業者が増大する最中に台頭し始めたナチ党の制服に陶醉する大衆の姿が、ツックマイヤーには重なって見えていたのかもしれない。本論では、ナチ党の勢力に危険性を感じ取っていたツックマイヤーが、作品を通じてナチ党を支持する大衆に警告を発しようと考えたことを、1900 年代初頭と 1930 年代初頭の両時代の社会状況を対比しながら明らかにしていく。

また、「ドイツのメルヒェン<sup>1</sup>」と副題が付いている点にも本論は着目する。検閲に神経をとがらせているナチ党の目をそらすためにおとぎ話の一節を用いたこと、加えて、語り継がれている子ども向けのメルヒェンには、権力、権威、規則、秩序に服従してしまう普遍的なドイツ人氣質が語られており、権威におもねり立身出世を渴望する大衆、そしてナチ党に傾倒していく大衆に向けた皮肉を織り込んだ風刺作品であることも明らかにする。

【キーワード】 カール・ツックマイヤー、『ケーペニックの大尉』、メルヒェン、制服、検閲

---

<sup>1</sup> 原作の副題は「三幕のドイツのメルヒェン *Ein deutsches Märchen in drei Akten*」であるが、本論では「ドイツのメルヒェン」として論じる。

## 序章

1906年10月16日にベルリン郊外のケーペニックで、陸軍大尉に率いられた小隊が市庁舎にやって来て、市長を逮捕し、収入係と警察署長と共にベルリンの警視庁に連行する事件が起きた。しかし誰も市長の逮捕を命じておらず、捜査の末に大尉が偽物だったことが判明、元靴職人のヴィルヘルム・フォークトが逮捕された。

偽大尉に役人が騙された事件を題材にしたオペレッタやモリタートが作られ、ヴィルヘルム・シェーファーは小説『ケーペニックの大尉 (*Der Hauptmann von Köpenick*)』(1930)にこの事件を取り上げた<sup>2</sup>。ツックマイヤーも同年に戯曲『ケーペニックの大尉 (*Der Hauptmann von Köpenick*)』を出版し、翌1931年3月5日にドイツ劇場(ベルリン)で初演を迎えると、各地で上演されて大成功を取めた。

事件発生から24年後にツックマイヤーがこの題材を取り上げたのはなぜだろうか。作品の背景には、帝国ドイツ時代の規律を過度に重んじる軍人や官吏の態度と軍服に権威を感じる国民、そして、ヴァイマル体制が揺らぎ、ナチ党に政権奪取の兆しが現れているドイツの社会状況が深く関係しているのではないだろうか。ヴァーゲナーは、ツックマイヤーがナチスを念頭に置いて執筆したこと(本論第1章参照)を受け、「ツックマイヤーは『ケーペニックの大尉』に第一次世界大戦以前のヴィルヘルム二世の社会だけではなく、1930年代の社会における過ちを指摘する彼自身のオイレンシュピーゲルを見出した<sup>3</sup>」と述べ、社会批判の作品であると解釈する。同時に、ベルリンの方言を用いた点にも触れ、「方言によって風刺的な意図の効力を失うことなく、大衆劇と時事問題劇との結びつきが出来ているのか疑問を持つ必要がある<sup>4</sup>」と問題を指摘している。また、グローセはこの戯曲に、「ヴィルヘルム二世の社会における軍事主義の過剰さに対抗する時代風刺<sup>5</sup>」の一面があると示し、「その風刺的特徴が際立っていない結果、一方的な傾向戯曲、あるいはプロパガンダとして理解されかねない<sup>6</sup>」と解釈している。両者ともに風刺作品であることは認めつつも、その特色が弱いことを指摘している。

副題「ドイツのメルヒェン」と付けた点に着目してみよう。ヴァーゲナーは、グリム童話「ブレーメンの音楽隊」の一節が戯曲に用いられていることによって、メルヒェンの世界と戯曲が関連づけられている、と解釈している<sup>7</sup>。エンゲルジング-マーレクは「ブレーメンの音楽隊」について、動物たちがブレーメンに行き再起を図ろうとしたように、主人公フォークトが大都市ベルリンを目指したと解釈<sup>8</sup>したうえで、次のように考えを述べている。

---

<sup>2</sup> Wilhelm Schäfer, *Der Hauptmann von Köpenick*, München: Georg Müller, 1930.

<sup>3</sup> Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C. H. Beck, 1983, S. 62-63.

<sup>4</sup> Ebd., S. 74-75.

<sup>5</sup> Wilhelm Große, *Carl Zuckmayer, Der Hauptmann von Köpenick*, Hollfeld: C. Bange, 2014, S. 24.

<sup>6</sup> Ebd..

<sup>7</sup> Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 66.

(戯曲の) メインテーマ「現実社会における勢力への従順」は、グリム兄弟が集めたメルヒェンのテーマ「神を信頼する心」に相当する。メルヒェン（における敵や闘い）のように、目に見える敵や人間同士の紛争は戯曲にはない。メルヒェンの主人公は一人で悪魔と闘い、『ケーペニックの大尉』では実態がつかめない行政の力と戦う。(中略—論者) ヴィルヘルム・フォークトは、メルヒェンの魔法を解くことに成功する若くて純粋な登場人物に似ている<sup>9</sup>。

ヴァーゲナーもエンゲルジング-マーレクも副題に関して表面的な解釈に留まるのみで、ツックマイヤーの真意を読み取るには至っていない。1930年に制服にまつわる事件を取り上げて戯曲を執筆したこと、勢力を伸ばしているナチ党の存在が関係していることは、作家本人の言葉（本論第1章参照）から間違いない。おそらくツックマイヤーは、ナチ党の危険性を警告すべきと考えたのではないだろうか。ツックマイヤーの目には、1930年初頭に制服に魅了される大衆の姿が、ヴィルヘルム二世の治世下で軍服姿の人物に畏敬の念を抱く国民と重なって映ったのではないだろうか。そして1930年代初頭は、ナチ党が権力掌握に向けて戦略的に活動し、検閲にも神経をとがらせていた時期でもある<sup>10</sup>。検閲との関連の視点は、この作品を解釈するうえで必要不可欠と考えられる。しかし、ヴァーゲナーとエンゲルジング-マーレク、いずれの先行研究もその視点があるとは言えない。ツックマイヤーは検閲を念頭に置き、副題に「ドイツのメルヒェン」と付けたがゆえに、風刺が弱まったのではないだろうか。そしてそれは、ナチ党の検閲を切り抜ける手段であったと推測できる。

本稿は、ケーペニック事件が起きた1900年初頭と戯曲が発表された1930年初頭のドイツの社会状況と検閲の状況を踏まえ、メルヒェンが持つ教訓や普遍性も関連させながら、この戯曲がナチ党とそれに傾倒しつつある大衆に向けた皮肉を織り込んだ社会風刺作品であることを明らかにする。ナチ党の勢力拡大の過程に直面したツックマイヤーが検閲をかわしながら、党の危険性を訴える作品に取り込んだ意図を読み解くことは、反ナチの作家として活動するツックマイヤーの覚悟を浮かび上がらせることでもある。そして、ナチ党の政権掌握後の作家活動を研究するうえでも『ケーペニックの大尉』が重要な作品であると確認できるであろう。

## 第1章 世紀末のケーペニック事件と政治転換期の『ケーペニックの大尉』

ツックマイヤーは、『ケーペニックの大尉』執筆に取り掛かる前、友人で女優のアンネマリー・ザイデル (Annemarie Seidel, 1895-1959)宛ての書簡に「新しい作品の題材が浮かんだ<sup>11</sup>」(1930

<sup>8</sup> Ingerborg Engelsing-Malek, „Amor fati” in *Zuckmayers Dramen*, Konstanz: Rosgarten, 1960, S. 49.

<sup>9</sup> Ebd..

<sup>10</sup> ディーター・プロイアー著、浜本隆志ほか訳『ドイツの文芸検閲史』（関西大学出版部、1997）、335-334頁 参照。

<sup>11</sup> (Hrsg.) Gunther Nickel, *Carl Zuckmayer/Annemarie Seidel Briefwechsel*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 2008, S. 53.

年5月18日付)と記している。この題材は、オイレンシュピーゲルのことを指しているのであった<sup>12</sup>。同年夏、作品執筆を模索するツックマイヤーに俳優で演出家のコルトナー (Fritz Kortner, 1892-1970) がケーベニック事件を題材にすることを提案すると、ツックマイヤーは「これこそ私のオイレンシュピーゲルだ<sup>13</sup>」とひらめいた。弱者が知恵を使って高い身分の者達を欺き、権威を持つ者に立ち向かっていくオイレンシュピーゲルの姿と事件を起こしたヴィルヘルム・フォークトの様子が重なったと考えられる。

三幕の戯曲『ケーベニックの大尉』は、第一幕が世紀の変わり目の頃、第二幕と第三幕はその10年後という設定で、実際の犯人の経歴とその事件の経過とを極めて忠実に追った内容である。その筋はおおよそ以下のとおりである。

主人公の靴職人ヴィルヘルム・フォークトは、18歳の時に郵便為替偽造で15年間の実刑判決を受けた。刑務所暮らしの間に靴工の腕は磨かれたが、前科者であるがゆえに住民票も滞在許可書も所持しておらず、万事が規則に基づいているドイツ社会では、証明書がなければ生きてはいけない。仕事に就くには滞在許可書が必要で、役所で滞在許可書を手に入れるには仕事に就く必要があると言われる。靴工場で職を求めれば滞在許可書が必要だと言われ、堂々巡りとなる。この悪循環を役人に指摘しても「規則だから」と相手にされない。

ポツダムで職を探すフォークトが仕立屋のショーウィンドウに飾られている軍靴に見入っていると、店の奥で大尉の軍服を仕立てる店主に、目障りだと追い払われる。警察署に行き「外国へ行くように旅券をくれ」と要求すると、「管轄が違う」と言われ、保管されている書類に記された前科を問題視されてしまう。その書類さえなければ旅券を発行してもらえると考えたフォークトは、警察署に忍び込んで自分の前歴を記した書類を盗み出そうとしたが失敗し、再び刑務所送りになる。10年もの間、普仏戦争の志願兵であった刑務所長による軍隊式訓練を受けたフォークトは、軍隊というもののあり方に精通するようになった。

服役を終えたフォークトがベルリンで身を寄せた妹夫婦の元に、住居の一室を借りている少女がいた。病で床に臥せる少女にフォークトが「プレーメンの町の音楽隊」を朗読していると、「48時間以内に立ち退くべし」と書かれた通知が届く。息を引き取った少女の葬儀を終えると、フォークトは命令に従い妹夫婦の元を去り、そして古着屋で軍服を見つける。それは、10年前に追い払われたポツダムの仕立屋で、店主が新調していた大尉の軍服だった。寸分の狂いもなく仕立てられて素晴らしい魅力と権威に満ちた軍服の持ち主であった当の大尉は、私服姿で訪れたカフェで喧嘩をして役職を解かれた。不要になった軍服を仕立屋が引き取り、その後転々と持ち主が変わった末、

<sup>12</sup> Ebd., S. 230.

オイレンシュピーゲルを描きたいと綴っているが、まだヴィルヘルム・フォークトと結びついていない。

<sup>13</sup> Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir. Horen der Freundschaft*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 513.

1930年10月、アンネマリーに宛てた書簡で戯曲の完成を知らせている。(Hrsg.) Nickel, Zuckmayer/Seidel Briefwechsel, a. a. O., S. 58, 230.

古着屋に並んだのである。大尉の軍服を手に入れたフォークトは駅のトイレで着替え、偶然出くわした歩哨隊を連れてケーペニックの市庁舎へ向かう。

当時のドイツ帝国は警察官も役人も軍服の前にはひれ伏す時代であり、市長も軍服の人物には一言も反論できなかった。フォークトは市長を逮捕し、市の金庫を全て開けさせた。警察署長も市参事会も皆が大尉の命令に従った。しかし、旅券の発行が市庁舎の管轄外であることがわかると、フォークトは兵士たちに逮捕者の連行を命じ、自分は一人去って行った。

ケーペニック事件の捜査が一向にはかどらない最中、自首と引き換えに旅券の交付を約束して欲しいと、フォークトはベルリンの旅券課にやって来る。尋問室で、「いつでも祖国に戻って来られるように旅券が欲しかった」と告白し、鏡に映った自身の軍服姿を初めて見るフォークトが力強い笑い声をあげて作品の幕は降ろされるのであった<sup>14</sup>。

この戯曲は先述のように1931年3月5日にドイツ劇場で初演を迎え、その後ドイツ各地で上演されて大成功を取めた。ツックマイヤーは、ドイツ劇場で行われた初演のパンフレットで次のように述べている。

この作品は、実際に起きた出来事の細部を捩りどころにしたり、執着していません。証拠書類の乏しい表面的な意味をなぞっていません。というのも、それらの書類からはただ外見上の経過だけが認められるのであって、ある人間の人生あるいはこの世の物語の本質の総和ではないからです。

この作品は、状況を作り出した人々を非難するつもりも、人々を生み出した状況を非難するつもりもありません。

というのも、この作品が語ることは何か新しいものではなく、ドイツのメルヒェンだからです、そして、すべてのメルヒェンと同様に、とっくに過ぎ去ったものなのです —(中略—論者)— そしてただ、過ぎ去っていないものの「たとえ話」なのです。<sup>15</sup>

表面上の出来事は過ぎ去っているが、核心部分は昔も今も変わらない。言い換えれば、語り継がれているメルヒェンには、普遍的な人間の本性があるということがここでは強調されている。

次に、ケーペニックで起こった事件の経過に触れておきたい。陸軍大尉に率いられた歩哨隊がケーペニック市庁舎へやって来て、市長を逮捕した。金庫を押収し、市長と収入係そして警察署長をベルリンの衛兵所へ連行することを隊の上等兵に命じると、大尉は姿を消したのである。事件の翌日、『日刊 展望 (Tägliche Rundschau)』に次の様な記事が掲載された。

---

<sup>14</sup> Carl Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1995. S. 7-148.

<sup>15</sup> Carl Zuckmayer, *Ein deutsches Märchen*, in: *Programm Deutsches Theater*, Berlin, 5. März 1931, in: (Hrsg.) Barbara Glauert, *Carl Zuckmayer das Bühnenwerk im Spiegel der Kritik*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1977, S.156.



昨日、大尉に扮装した男がケーゲルからケーペニック市庁舎に小隊を率いてやって来た。その男は市長を逮捕させ、市庁舎の金を盗み、そこから辻馬車で去った。<sup>16</sup>

市長たちがベルリンの警視庁に連行された後に、誰も市長の逮捕命令を出していないとわかったことで事件が明るみに出た。一週間経っても犯人は捕まらなかったが、思い当たる人物と刑務所で一緒だったと言うカレベルクの証言を手掛かりに捜査を進めると、事件から10日後に元靴職人のヴィルヘルム・フォクトが逮捕された。4年間の実刑判決が下されたが、ヴィルヘルム二世の恩赦により2年足らずで釈放された<sup>17</sup>。

フォクトは大金を盗んだのだが、目当ては金ではなく旅券であった。市庁舎を占拠して偽造旅券を作ろうと考えはしたが、ケーペニック市庁には旅券発行所がなかったため、やむなく大金を持って逃走したのであった。犯行後、偽造旅券を手に入れようとして所持金の半分近くを投じていたが、偽造旅券を手にもすることも失敗に終わった<sup>18</sup>。だが思いがけないことに、逮捕されたフォクトの人気に火が付き、57歳の独身者に結婚の申し込みが殺到し、大富豪からの終身年金も約束された。釈放後もその人気は続き、軍服を着て街を歩いていたとされる<sup>19</sup>。

作品が発表された1930年代初頭はナチ党が頭角を現し、政権奪取の兆しが見え始めた時期であった。ナチ党の支持者たちの制服姿が街に増えていくと、ツックマイヤーの大学時代からの友人であるテオドール・ハウバッハ (Theodor Haubach, 1896-1945) やカルロ・ミーレンドルフ (Carlo Mierendorff, 1897-1943) たちは、ナチ党の動きを警戒した。彼らは1931年12月に「鉄の戦線 (Eiserne Front)」を結成し、ツックマイヤーもその一員になった。エーリヒ・マリア・レマルク原作『西部戦線異状なし (*Im Westen nichts Neues*)』(1929)の映画がゲッベルスらに非難された時に、ツックマイヤーはそれを抗議する内容の演説を行った<sup>20</sup>。1930年代初頭は、世界恐慌の影響によりドイツでは失業者が街に溢れていた頃でもあった。エンゲルジング-マーレクは、ツックマイヤーが独裁政治に対する警告として戯曲にケーペニック事件を用いたと指摘しているが<sup>21</sup>、作家自身も1966年に出版した自叙伝で次のように述べていることから、ナチスに対する警戒心を抱いていた可能性が高い。

たとえこの話 (ケーペニック事件) が20年以上前に起きたことであっても、まさし

<sup>16</sup> *Tägliche Rundschau*, Berlin, 17.10.1906, in: Große, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 104.

<sup>17</sup> Große, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 106-107.

<sup>18</sup> 種村季弘『べてん師列伝』(青土社, 1983), 36-37頁 参照。

フォクトが旅券を必要とした本来の理由は、姉の紹介で知り合った女性と結婚するためであった。

<sup>19</sup> 同上, 20頁, 74-77頁 参照。

<sup>20</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 525-526.

ミーレンドルフは若い仲間たちと、自分たちのシンボルである三本の矢をハーケンクロイツの上に描く行為を夜間に行っていた。

<sup>21</sup> Engelsing-Malek, „*Amor fati*“, a. a. O., S. 48.

く1930年の話であった。この年に国家社会主義党が第二政党として国会に入りこみ、国民を新しい制服に酔わせた。(中略—論者) ドイツ国内に危険が広まっていた<sup>22</sup>。

第一次世界大戦から帰還後にツックマイヤーは、大学でハウバッハやミーレンドルフたちと平和主義者と社会主義者に討論の場を与える雑誌『法廷 (*Das Tribunal*)』を発行していた。おそらくミーレンドルフらとの交流を続けていたことによって、ツックマイヤーは戯曲を通じてナチ党の危険性を大衆に訴えようと考えたのではないだろうか。

また、重視すべき事実は、ツックマイヤーがいわゆる「半ユダヤ人 (*Halbjude*)」であることだ。父方の祖先はオーストリアからライン地方にやって来て、製粉業を始めたアーリア人である。一方の母方の祖父母は、ライン地方に居住を始めるとキリスト教に改宗したフランス系の血筋を持つユダヤ人であった<sup>23</sup>。ナチ党は政権を掌握する以前から、民族的かつ人種イデオロギー的のスローガンを用いてユダヤ人を締め出す反ユダヤ主義的な運動を繰り広げており<sup>24</sup>、その運動に敏感であったであろうツックマイヤーは、非アーリア人に向けるドイツ人の振舞を軍服/制服の権威に置き換え、ドイツ人による人種差別や身分の優劣に関する問題を戯曲に取り入れようとしたとも考えられるのではないだろうか。

## 第2章 大衆の関心を引きつける制服

ケーペニック事件が起きた1900年代初頭と作品を執筆した1930年初頭のドイツ社会には軍服/制服姿が街に溢れ、大衆は軍服/制服姿の人物に畏敬の念を抱き羨望するという共通点が見られることから、ツックマイヤーは勢力を拡大するナチ党だけではなく、党に陶醉している大衆に対しても警戒心を抱いたのではなからうか。この章では軍服/制服に焦点を当てて、作家が戯曲に込めた意図を探っていく。

1871年に普仏戦争で勝利を取めたことで国民の軍への熱狂は高まり、ドイツ人は軍服姿の人物に畏敬の念を抱くようになる。次第に帝国議会の影響力は薄れ、帝国宰相と官僚たちに支配された官治行政に至った。将校の軍服常時着用が義務付けられていたことで、軍人は大衆の中でその存在を示し、社会における身分を可視化させる重要な役目を果たしていたようだ<sup>25</sup>。『ケーペニックの大尉』においてもドイツ帝国時代の軍服の威厳を示す場面が随所にある。一例が、軍服を仕立てている最中、後ろのボタンの位置が規定通りになっていないことを指摘するフォン・シュレットウ大

<sup>22</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 513.

<sup>23</sup> Ebd., S. 185.

ツックマイヤー自身はカトリックで、伝統的なユダヤ教の教養に基づく教育は全く受けていない。

<sup>24</sup> ハンス・モムゼン著、関口宏道訳『ヴァイマル共和国史 民主主義の崩壊とナチスの台頭』(水声社, 2001), 276頁 参照。

<sup>25</sup> 五十嵐一郎『ドイツ帝国時代を読む 権威主義的国民国家の岩盤とその揺らぎ』(社会評論社, 2018), 90-91頁 参照。



尉と仕立屋アドルフ・ヴォルムザーとのやり取りである。

フォン・シュレットウ：この軍服はどこかおかしいのだ。首のあたりがどうもおかしい気がする。それに、後のボタンが規定通りになっていないのだ。

仕立屋が計る。

ヴォルムザー：大尉さん、厳密に言ったらあなたのおっしゃる通りです。(中略)。ボタンは半センチほど離れています。

フォン・シュレットウ：言った通りだろう。(中略)。つまらないことだと思っているだろうが、そんなことはない。こんな小さなことにも、軍人の真価というものが見られるものだ。こういうことに、あらゆることがかかっているのだ。そこに深い意味があるものなのだ。<sup>26</sup>

ヴィルヘルム二世の治世下のとある将校が、軍服が階級誇示的な深層意識に織り込まれていることを次のように書き残している。

職業身分用の特別服である軍服を着用することは、一つの社会的記号となった。職業の目的のため、つまり戦争のためには、旧来の軍服は全く不適切であった。(中略—論者)その後、「灰緑色」が広まった時でさえ、将校はまだ光沢のあるバッジ、非実用的な副官肩帯、まわりに見える勲章用留め金、そして純軍事的観点からすると、まるで役に立たない瑣末なもの—それらは心理的に瑣末ではなく、はっきりと階級を識別するものであった—に固執した。このように軍服はその本来の目的を取り去られ、そしてこの取り消しとともに軍服の本質に関する誤った観念も自然とできあがった。<sup>27</sup>

軍服に寸分の狂いも許さないフォン・シュレットウの言葉には、自分が大衆の羨望的であるがゆえに見た目にこだわり、上級身分に驕る将校の姿が見て取れる。ツックマイヤーは、そのような社会状況に対する皮肉を込めた場面を描きだしたのではないだろうか。

また、当時の将校には、国家の中心的役割を担う者として市民生活においても名誉心を忘れずに振る舞うことが求められていたため、制服着用時の将校は何らかのトラブルに遭っても警察官に逮捕されない特権があった<sup>28</sup>。その一方で将校は、制服着用時はもちろん、私服着用時でも劇場の下等席に座ることも安い飲食店に行くことも禁止されていた<sup>29</sup>。戯曲では、フォン・シュレットウが

<sup>26</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 13-14.

<sup>27</sup> 五十嵐 (社会評論社, 2018), 91 頁 参照。

<sup>28</sup> 同上, 39-40 頁 参照。

<sup>29</sup> (Hersg.) Gerhard A. Ritter und Jürgen Kocka, *Deutsche Sozialgeschichte, Dokumente und Skizzen, Bd. 2.: 1870-1914*, München: C. H. Beck, 1974, S. 229.

私服で街のカフェに出掛け、友人とビリヤードを楽しむ場面がある。そこに軍服を着たまま泥酔状態でやって来た近衛兵と小競り合いが始まり、暴力事件に発展して逮捕されてしまう。エンゲルジング・マーレクが「制服は秩序のシンボル<sup>30</sup>」と解釈するように、規則に反し、秩序を乱した結果、フォン・シュレットウは大尉の職を解かれてしまうのであった。大尉と近衛兵の喧嘩が起こる直前、そのカフェに刑務所で知り合ったカレと一緒にいたフォークトは、コニャックを注文するカレに無駄遣いしないようにたしなめていた。

フォークト：(金を)全部使っちゃったらどうすんだ？

カレ：そしたら服でも売って飛ばすさ。こいつはまだまだ立派なもんだぜ。

フォークト：おい、そんなことするもんじゃねえ！見た目が大事なんだ、人間は!! オレはおめえに言うておくぞ、見た目がすべてだ。<sup>31</sup>

互いに身の振り方を話していた矢先、暴力事件の一部始終を見たフォークトは、「見ろ、カレ — オレが言った通りだろ？人間は見えているように、判断されるんだ<sup>32</sup>」と、外見の重要性を念押ししている。

不要になった軍服をフォン・シュレットウから返されたヴォルムザーがその軍服をショーウィンドウに展示しようとした時、予備少尉に任命されることになったオーベルミュラーが来店する。ドイツ帝国は、厳格な序列で社会が成り立っており、権力は軍人、貴族、裕福な市民が持っていた。貴族ではない者は、オーベルミュラーのように、予備士官になることで出世を目指すのである。ケーペニックの市役所で働き、今回の任命で上手くいけばいつか市長になれると考えているオーベルミュラーに軍服を売りたいヴォルムザーは、少し手直しするだけで直ぐに着られる、安くすると言い、試着させる。大尉の軍服はまだ早いと断るオーベルミュラーであったが、鏡に映る自分の姿を見るやいなや軍服を気に入る、早速購入するのであった。

フォン・シュレットウ大尉が新調した軍服は、大尉からオーベルミュラー予備中尉へ、そして仕立屋の娘アウグステへと持ち主が次々に変わり、古着屋に行き着く。仕立てから10年が経ち、持ち主が変わるにつれ状態が悪くなっているにも関わらず、軍服の権威は無くならなかった<sup>33</sup>。この権威が事件の要因であり、戯曲の核でもあると考えられるのではないだろうか。古着屋の店主に「素敵でしょう。軍服だけが散歩しても、着ている人間がいなくても、—いいですか、どの兵隊さ

<sup>30</sup> Engelsing-Malek, „*Amor fati*”, a. a. O., S. 49.

<sup>31</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 25.

<sup>32</sup> Ebd., S. 37.

<sup>33</sup> フォン・シュレットウのために仕立てられた軍服は、オーベルミュラーの手に渡る。きつくなった制服を無理に着ようとして破けてしまい、仕立屋に返される。仕立屋の娘がパーティーの仮装で着た軍服にシャンパンがかけられ、シミだらけになってしまう。古い屋で売られているその軍服をフォークトが買い取る。軍服の状態は、登場するごとにほろびや汚れがある状態であっても、軍服の威厳だけは残っている。

人も敬礼しますよ、本物ですからね！<sup>34</sup>」と聞き、身分や出世に縁遠いフォークトでさえ軍服に惹きつけられたように見入ってしまう。本物の軍服が強い威力を有していることを伝える場面であろう。古着屋の店主の言葉通り、購入した軍服を着たフォークトを本物の大尉と信じた歩哨隊は、彼の命令に従うのであった。事件後に自首したフォークトは、ベルリンの警視庁で尋問を受ける。

刑事課長：全く何も準備をしなかったのですか？そしてそのまま出かけて行って、最初に会った出来が良い歩哨隊を道で捕まえて、それを連れてケーペニックへ行ったってことですね？

フォークト：あっしは軍服を着てたんでね — そこで自分に命令を与えたわけでさ — そしてあっしは出発して、実行したってわけでさ。<sup>35</sup>

「軍服を着ている人物は自分にも命令できる」というオイレンシュピーゲル的な知恵と欺きを読み取ることができると同時に、人間ではなく軍服そのものが支配をしているという皮肉が込められている言葉である。ケーペニックの市長となったオーベルミュラー自身、かつて自身が所有していたその軍服を偽大尉が着ていることに気がつかず逮捕されてしまう。軍服の権威という虚像に人間は簡単に騙されてしまうという揶揄であろう。権威についても、フォークトと刑事課長が軍服を前にした会話で表現されている。

刑事課長：本当だ！本物の近衛兵の上着だ、ポツダム製の。かなりの年代ものだな、これは。

フォークト：今でもまだまだ使えますぜ、そうじゃないですか？<sup>36</sup>

軍服にまつわる場面からは、ドイツ人の権力や権威に服従してしまう面を持ち、高い階級の者を無条件で畏敬して羨望することがうかがえる。このような大衆心理を逆手に取って台頭したのがナチ党である。

1929年10月にニューヨークで起きた株式市場大暴落に端を発した世界恐慌がドイツ経済を直撃し、企業の倒産が相次ぐ。すると200万人の失業者が街に溢れ、1931年の冬には700万人に及ぶのであった<sup>37</sup>。当時は弱小政党であったナチ党はそれまでの政党とは異なり、戦略的に計画された宣伝活動を行った。「全ドイツ人に職とパンを！」などのわかりやすいスローガンをういて、不況に苦しむ多くのドイツ人の心を惹きつけていった<sup>38</sup>。スローガンやポスター、特徴的な敬礼、

<sup>34</sup> Ebd., S. 107.

<sup>35</sup> Ebd., S. 145.

<sup>36</sup> Ebd., S. 146.

<sup>37</sup> Thomas Ayck, *Carl Zuckmayer mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten dargestellt*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1977, S. 89.

<sup>38</sup> NHK取材班『ヒトラーと第三帝国』（KTC出版、2003）、79-80頁 参照。

ショーのような党大会が知られているように、ナチ党は宣伝を駆使する。そのプロパガンダの手段の一つが制服であった。デザインを駆使した褐色（褐色のシャツ，黒ネクタイ，黒ズボン）のスマートに見せる制服は大衆の関心を引きつけた。制服を着た若者が合図により一斉に向きを変える姿に目を奪われた人びとも少なくなかった<sup>39</sup>。ナチ党は職の無い若者を突撃隊に受け入れ，集会の警備やデモ行進などを担当させるなど，使用できる全勢力を政治的宣伝に費やした。大きな行事には地域の全勢力を投入する程であった<sup>40</sup>。ツックマイヤーは『ケーベニックの大尉』を通じて，ナチ党のプロパガンダの術中にはまっていく大衆へ警告をしたと考えることができる。例えば，オーベルミュラーが軍服を購入するために仕立屋を訪ねた際，鏡に映る自身の軍服姿を目にして次のように言う。

人間は衣装次第だっというが，まさにその通りだ。その上，こういう軍服というものはいっそうそれをはっきりさせる — 一種の魔法のようなものだ，軍服というものは —<sup>41</sup>

この場面に，ナチ党による制服を用いたプロパガンダへの揶揄が含まれていると考えることは不自然ではないだろう。先述したように，予備士官になることを目指していたオーベルミュラーは軍服への憧れが非常に強く，軍服に袖を通したことによって一瞬で，まさに魔法のごとく心を奪われている。「魔法」という言葉をあえて上昇志向が強い人物に用いることで，制服の持つ魔力的作用，つまりナチ党のプロパガンダの一つである制服と重なるように描いた場面だと考えられる。あらゆる精神活動を操作してより効率的な機関を作り上げるために，ナチ党は文学をもプロパガンダの手段にしていく。その一環で検閲が行われていた<sup>42</sup>。戯曲の出版はもちろんのこと，上演も実現させたいツックマイヤーには，検閲をくぐり抜ける難題が立ちふさがっていたことが推測できる。

### 第3章 1930年代初頭の検閲

第一次世界大戦後に大衆文化が開花し始めると，上流階級者たちは自分たちの身分が揺らぐのではないかという不安が広がり，根底に流れていた反ユダヤ主義が顕在化し始めた。それは次第に組織化され，ナチ党のイデオロギーとして見られるようになる。一般大衆の反ユダヤ主義の感情は特に同化していないユダヤ人に向けられ，大学ではドイツ大学連合の影響下で反ユダヤ主義的潮流が増加していった。出版界にも影響を与えたこの流れをナチ党は見逃さなかった<sup>43</sup>。1933年1月にナチ党が政権を握ると，表現の自由は完全に奪われた。2月27日に国会放火事件が起き，5月10

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> モムゼン（水声社，2001），308頁 参照。

<sup>41</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S 60.

<sup>42</sup> ブロイアー（関西大学出版部，1997），342頁 参照。

<sup>43</sup> 同上，276-279頁 参照。

日にナチ党に傾倒する学生団体が先頭に立って非ドイツの文献の焚書をベルリンで行った。共産主義に関連する文献やユダヤ人の著作物、ドイツ精神に反するとみなされた書物など、ナチ党に適合しないすべての作家と書物の排斥が行われた。ツックマイヤーの作品もその対象であった。母親がユダヤ人であることに目を付けたナチ党は、ツックマイヤーを「ユダヤのアスファルト文士 (jüdischer Asphaltliterat)<sup>44</sup>」と侮蔑し、全戯曲をドイツ国内で上演禁止にした。

ツックマイヤーが「ドイツのメルヒェン」と副題を付けた点に関して、小宮は「検閲を避けるため<sup>45</sup>」と記し、検閲を意識した戯曲であることを指摘しているがそれ以上の言及はない。『ケーペニックの大尉』に関する検閲について言及している資料をまだ目にはしていないがゆえに、ツックマイヤーが検閲を意識していたか否かについて明確なことを述べることはできないが、ツックマイヤーが脚本に携わった映画『嘆きの天使 (Der blaue Engel)』(1929)はハインリヒ・マンの小説『ウンラート教授 (Professor Unrat)』(1905)が原作であることから、マンとの交流を通じて検閲に注意深くなったことは想像できる。

ヴァイマル共和国は、1919年に開催された国民議会で「芸術は自由である」と宣言し、検閲の廃止を基本的人権の中に組み入れた。しかし、いかなる文学的検閲も行われなくなったというわけではなかった。現行法の違反が確認された場合、それを告訴することは全国民に許され、芸術作品の適法性が検査された<sup>46</sup>。文学作品、作者、出版者、劇場関係に対する公的な裁判の審理は、文芸検閲のただ一側面に過ぎなかったのであるが、作家にとって深刻かつ有害であったのは、次第に合法化されていく数多くの非合法的な検閲行為や脅迫行為である。その時、憲法で保障された言論・集会・出版の自由が空洞化していくことを非難した人物がハインリヒ・マンであった。新たに文学的検閲の役割を担うことになった法的機関は通常裁判所であった<sup>47</sup>のだが、マンら左翼傾向の作家やジャーナリストたちは、非公式の検閲によってドイツ国家党やナチ党をはじめとする右翼政党の圧力にさらされていることを感じていた<sup>48</sup>。ナチ党の文化政策の一つとして、学校、劇場、博

---

<sup>44</sup> Susanne Buchinger, *Zwischen Heimat und Exil. Der rhein-hessische Schriftsteller Carl Zuckmayer*.

URL: [https://politische-bildung.rlp.de/fileadmin/files/Blaetter\\_zum\\_Land/BRZ\\_Zuckmayer.pdf](https://politische-bildung.rlp.de/fileadmin/files/Blaetter_zum_Land/BRZ_Zuckmayer.pdf)

(abgerufen am 23. 9. 2021)

「アスファルト文学 (Asphaltliteratur) は、ドイツ文学において大都会の諸事象を素材とした文学である。ドイツ語圏ではヴィーンとベルリンを中心に発展し、1920年代ベルリンの都市大衆文化を背景に頂点に達した。「アスファルト」の語は大都会、とりわけベルリンの代名詞のごとく用いられた。なかでもゲルマン主義や郷土芸術を叫ぶナチスは、ユダヤ系そして左翼アヴァンギャルド系の文士・ジャーナリストたちを主たる担い手とするベルリン大都会文学をしばしば「アスファルト文学」あるいは「文化ボルシェヴィズム」と誹謗、攻撃した。

デジタル版 集英社世界文学大事典「アスファルト文学」[抜粋], JapanKnowledge,

URL: <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0013468> (参照日 2021年9月23日)

<sup>45</sup> 小宮曠三「戯曲と詩的精神 ツックマイヤーの場合」東京大学教養学部外国語学科編『外国文学研究紀要』2(6), (東京大学出版会, 1952), 19頁 参照。

<sup>46</sup> プロイアー (関西大学出版部, 1997), 318頁 参照。

<sup>47</sup> 同上, 318頁 参照。

物館、文化施設において政治的に好ましくない反ドイツ的な人物を取り締まりの対象にし、1930年4月5月の条令（「ドイツ国民性のために黒人文化に反対する」）によって映画『西部戦線異常なし』が禁止された<sup>49</sup>ことも、ツックマイヤーが検閲を意識した出来事と推測できる。ナチ党は、ヴァイマル共和国の時代から自分たちの意に反する者の排除を着々と実行していたのだった<sup>50</sup>。

エンゲルジング-マーレクは、フォークトが必死に入手しようとする旅券に関して、「旅券は、自由と人間らしさのしるしである」と解釈している<sup>51</sup>。ポツダムの仕立屋に追い払われて、次に向かった警察署でフォークトは以下のように語る。

警部：（書類を読んで）刑を終えてから、外国へ行ったんですね。

フォークト：その通りで、ボヘミアとブカレストへ。

（中略）

警部：私がほんとに知りたいのは、なぜあなたがドイツにまた戻って来たかってことです。

フォークト：故郷が恋しかったんでさ。あすこじゃ何もかも違ってらるんで、話し方までまるっきし違うんだ。つまるところ結局は、人間にゃ、その生まれた国の言葉ってもんがあるんでさ、何を失くしたって言葉を失くしっこねえだ。信じられんでしょね、ドイツがなんと素晴らしいか、遠く離れていつもそればかり考えてると。<sup>52</sup>

加えて、フォークトの旅券に対する並々ならぬ執着は、旅券を発行することを条件に自首した彼と監査官が交わす会話に見ることができる。

監査官：禁固刑は免れないのに、どうしてそんなに落ち着いた目をしておられるのですか？

フォークト：なぜかって？ありゃもう済んだことです、慣れてまっさ。せやけども、旅券なしに走りまわったり、追いかけてこしたり、辛い思いをすんのは、もう、全然我慢がなりませんや。

監査官：しかし、あなたはお金を持っているでしょう、4000マルク以上も、不足はないで

---

<sup>48</sup> 同上、335-337頁 参照。

兵役拒否を弁護したり、第一次世界大戦におけるドイツに共同責任があるとの見解をしめしたりすれば、死刑の規定さえ備えられていた「国家保護法」をナチスが国会に提出したのは1930年3月12日である。ナチ党は権力掌握の以前から政治的に好ましくならぬ反ドイツ的なものを肅清し、1933年1月30日以降はヴァイマル共和国終盤から準備してきた自由の権利の制限を徹底して継続したに過ぎないのである。1933年以前にドイツで栄えていた豊かな芸術・文化生活は大幅に破壊されるか、亡命地へ追いやられてしまった。同上、340-341, 347頁 参照。

<sup>49</sup> 同上、337頁 参照。

<sup>50</sup> 同上、335頁 参照。

<sup>51</sup> Engelsing-Malek, „*Amor fati*“, a. a. O., S. 50.

<sup>52</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 19-20.



しょう。(中略) そのお金であなたは遠くまで旅に出れたでしょうに!

フォークト: そんだけあれば国境を越えることだってできまっさ, けどその時はもう戻ってこれませんや, そうなれば外国で骨を埋めるってことになっちゃいますわなあ。いんや, ダメだ。旅券が欲しいんすわ, そうしたら, あっしは安心すんでやんす。<sup>53</sup>

両会話から, フォークトの旅券への執着が伝わってくるのではないだろうか。旅券は身分を証明する「存在の証明」であり, いつでも祖国/故郷に戻って来られる, つまり自由な移動を保障するためのものでもある。証明書が無いがゆえに職探しも上手くいかない, 役所へ行っても酷い扱いを受け, 居場所もないフォークトは, 人間としての最低限の権利を得ることができないその辛さに嫌気がさしたのである。ドイツ語を話し, ドイツで働き, ドイツで最期を迎えたいと願うが故に, 禁固刑の判決が下されるのを覚悟で, それと引き換えに旅券を要求したのである。それは権力を持たないフォークトが考えた知恵であったと言えるのではないだろうか。

#### 第4章 戯曲におけるメルヒェン要素

知恵を使って立場が上の者を痛い目に合わせるオイレンシュピーゲルが織り成す弱者と強者の逆転劇は, 『テイル・オイレンシュピーゲル』の読者を楽しませる重要な要素になっている。自分自身のオイレンシュピーゲルを描きたいと考えていたツックマイヤーは, 『ケーペニックの大尉』に逆転劇の痛快さを取り入れた。痛快活劇を提供すると同時に, ツックマイヤーが訴えたかったことは, 「権威に弱い」というドイツ人気質であったのではないだろうか。この章では, 戯曲で引用されている「プレーメンの音楽隊」に焦点を当て, ツックマイヤーが作品に込めた意図を探っていく。

このメルヒェンが戯曲に用いられているのは, ベルリンで暮らす妹夫婦から一室を借りて病床に臥す少女に頼まれて, フォークトが朗読する場面である。病の少女を登場させた理由は, 大量生産時代に突入していた1900年代の劣悪な労働環境と執筆当時の失業状況が関係していると思われる<sup>54</sup>。この少女が死に至ることで, 読者/観客が暮らす1930年代初頭の失業者が増えていく社会状況と重ね合わせる効果を狙ったと考えられる。朗読を始めるや否や, 役所からの封書が届いたのであるが, 封を切らずに読み続ける。

—まだやっていくにはいけるけど, 今じゃどんな忠告も役に立たない。いったいどこへ行けって言うんだ?

—オレたちと一緒に行こう, とオンドリは言いました —死ぬよりましなことは, どこでだって見つけれられるだろうよ。<sup>55</sup>

<sup>53</sup> Ebd., S. 143.

<sup>54</sup> 池内紀『はくのドイツ文学講義』(岩波書店, 1996), 116頁 参照。

少女が眠ったことに気が付いたフォークトは、届いた書類に目を通す。そこには、48時間以内に管轄区から退去せよとの命令が記されていた。後日、少女の葬儀を済ませたフォークトは、旅券を手に入れることを決意する。それは、規則や秩序に臆することなく軍国主義の下で守られている秩序に立ち向かう覚悟でもあった。「ブレーメンの音楽隊」は、老いて使い物にならないために飼い主から捨てられた4匹の動物が偶然見つけた森の中の一軒屋が泥棒たちのアジトであることを知り、暗い家の中で嘯みついたり引っかいたりして泥棒らを追い出し、そこで余生を楽しく過ごすというメルヒェンである。ドイツ人の権威の弱さが題材にされ、弱者と強者が逆転する教訓を含んだ物語であると考えられる。一方の戯曲は、厄介者扱いされる年老いた前科者のフォークトが、ガラタの並ぶ古物商で手に入れた古着の軍服で大尉に変身し、権威に立ち向かう。ツックマイヤーがこのメルヒェンを選んだ理由は、権威に立ち向かう弱者たちを介し、変わることはないドイツ人の本質を批判する意図があったのではないだろうか。

また、義理の弟フリードリヒ・ホープレヒトも制度によって不公平な扱いを受けていた。ホープレヒトは軍曹になることを最高の望みとして日々勤務に努めていたが、予算縮小によって昇進する望みが絶たれる。しかし、ホープレヒトは不服があったとしても国家の規則には異議を唱えることなく無くそれに従う人物であった。人間の尊厳を主張するフォークトに反し、国家に忠実なホープレヒトは「秩序」という言葉を繰り返して国家を擁護し、二人は言い争いをする。

ホープレヒト：(前略)我々は国家の中で暮らしているのです — そして我々は秩序の中で暮らしているのです — その外側ではあなたは暮らせないのですよ、そんなことをしてはいけないのです！どんなに難しくても — 再び中に入って行かねばならなかったのです！

フォークト：何の中へ？国家の中へかね？秩序の中へかね？滞在許可書なしに？そして旅券もなしに？

ホープレヒト：いつか貰えますとも！もう一度入って行くんです！

フォークト：そうか — すると、どうやって入って行けばいいのかね？いったい何が助けてくれるのかね？もう長いこと誰もわしを人間扱いしてないんだ！

<sup>55</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 90.

グリム童話では、「(前略)今じゃノドを張りあげても、もう長く叫べないんだ。」「おやまあ、オンドリ君」とロバは言った。「ボクラと一緒に楽しく行こうよ、ボクラはブレーメンに行くんだ、死ぬよりましなことは、どこでだって見つけられるよ。」と語られている。Gesammelt durch die Brüder Grimm, *Ausgewählte Kinder- und Hausmärchen*, Stuttgart: Philipp Reclam jun., 1981, S. 90.

しかし戯曲『ケーベニックの大尉』では、「死ぬよりましなことは、どこでだって見つけられるでしょうよ」がオンドリの台詞になっている。おそらくプロイセン軍の尖頂付の軍帽 ピッケルヘルメットを連想させるように、ツックマイヤーが作品に合わせたのであろう。

ルクセンブルクにあるフォークトの墓には、ピッケルヘルメットの石像がある。Große, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 101.

ホープレヒト：人間なんですよ、もしあなたが人間の秩序に身を置けば。南京虫も生きていますよ！

フォークト：その通りだ！南京虫だって生きていますよ、フリードリヒ。わかるかい、どうして南京虫が生きていますのか？はじめに南京虫があって、そして南京虫の秩序がある！はじめに人間があって、フリードリヒ！そして人間の秩序があるんだ！

ホープレヒト：あなたは従おうとしないんだ。それなんだ！人間になりたい者は — 従わなければならないのです、わかりますか？

フォークト：従え、か。その通りだ！だが、何に従うんだ!? まさに、それを知りたいってんだね！その秩序が正しいのであるのならば、フリードリヒ、そんなもの秩序じゃない！<sup>56</sup>

会話の最後、フォークトは「プレーメンの音楽隊」の一節に応えるかのように、「心配しなくてもいいんだよ。わしがもう少し頑張ればいいんだ、やるよ。他の連中にやれることを、わしだってやってられないことは無いよ、まだまだ<sup>57</sup>」と言い残して妹夫婦の元を去る。そして古着屋で軍服を手に入れる。その瞬間、今までの追い出す/虐げる側の者と、追い出される/虐げられる側の者の立場が逆転し始めるのである。弱い主人公が知恵と勇気を持って大きなものに立ち向かうメルヒェンでは魔法使いが登場し、主人公に呪文や魔法の道具を与える。一方、フォークトが知恵と勇気を持って大きなものに立ち向かうために用いたものが軍服である。『ケーベニックの大尉』では、古着であるにもかかわらず威力を発揮する軍服が、魔法の道具としての役目を担っているのではないだろうか。加えて、「プレーメンの音楽隊」のように、厄介者のフォークトが使い物にならない汚れた軍服を用いて大事件を起こすというメルヒェン的な要素を、ツックマイヤーが作品に取り入れていたとも解釈できるのではないだろうか。人間中心ではなく、制服/軍服中心の社会であることへの批判を軍服として具現化し、その軍服に振り回される人間を風刺していると考えられる。

また、魔法の道具である軍服がユダヤ人ヴォルムザーの営む仕立屋で縫製され、クラカウ出身の男が営む古着屋でフォークトに購入される点にも注目すべきであろう。ヴォルムザーは、軍服の虜になっている身分の高い人物たちに調子を合わせることで商売を続けられることを自覚している。例えば、軍服を新調するフォン・シュレットウ大尉が軍人の真価について語ったことに対して、「ごもっともでございます、大尉さん、その通りですよ！手前は常にそう申しておるのですよ。フリードリヒ大王、至上命令、我が軍隊の教育操典など、誰だって真似することはできません。そのようなものや偉い方々が、世界に鉄槌を下すわけですよ！<sup>58</sup>」と半可通な知識を並べる。予備少尉に就くオーベルミュラーが来店した際には、大尉から返品された軍服を購入させようと媚びを売る。

<sup>56</sup> Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, a. a. O., S. 103.

<sup>57</sup> Ebd., S. 106.

<sup>58</sup> Ebd., S. 14.

ヴォルムザー：手前どもで注文を受けたのですが、その方が急に退官しなければならなくなつたもので — あのスキャンダルについて何もお聞きになってはおられないでしょう、「女性をからかった」、言うまでもないことです。

オーベルミュラー：ええ、結構です。自分はスキャンダラスな事件には興味がありません。世間のうわさになって、そういうことはいつも歪められているものです。

ヴォルムザー：その通りです、少尉さん、その通りですよ！いつも手前が申していることです。陰口を止めろ、無駄口は叩くな、って。半分は嘘ですし、もう半分は自分に関係の無いことです。手前どもの所ではいろいろな話が持ちこまれますけれど、私は一切聞いてはいません。<sup>59</sup>

顧客の境遇に調子を合わせ、自分の言葉を現金に代えていくことをヴォルムザーは心得ている。つまり顧客の弱点を見抜き、それを利用しているのである。10年後にこの軍服は再びヴォルムザーの元に戻って来ると、ヴォルムザーの娘がパーティーで近衛兵に扮するためにそれを着て行き、シャンパンを浴びる始末となる。娘の結婚相手を探す目的も兼ね、騎兵大尉や司法官試補をもてなすパーティーを企画したのはヴォルムザー自身であった。いつしかこの軍服は、身分ある者が訪れることはない区域でクラカウ出身の男が営む古着屋に並び、フォークトがそれを購入する。ヴォルムザーは同化ユダヤ人であるとはいえ、国家の中核的な職務に就くことは許されておらず、軍服を仕立てるといふ国家の栄光を補助する職に就くに留まっている。一方のクラカウの男は、ドイツ人から蔑視されている存在である。その両者が、身分に執着するドイツ人をあざけるような事件に軍服を介して加担している可笑しみと皮肉が込められているのではないだろうか。

ブレーメンの動物たちが背中に乗って大きな姿になるという光景は、見た目が放つ権威、つまり「大きいもの、強いもの＝権威」を表現し、それに泥棒が簡単に騙されてしまう様子は、権威に弱い人間が暗示していると取れる。戯曲が出版された1930年代初頭においても、上流階級への憧れを抱く大衆、身分に驕る役人たちが多く存在していた。制服を着ているだけで信用される時代の権威主義を弱者が逆手に取り、子ども向けのメルヒェンで語られる「強者 対 弱者」の構造は、数世紀を経てもなお繰り返されている。自首したフォークトは、刑事課長から「いったいどうやって思いついたのですか、偽の大尉になって、ああいうことをやるうなんて？」<sup>60</sup>と問われ、「なんてことはありゃしません、子どもですら知ってまっせ、わたしの所じゃ軍人は何でもできることを。そんなことわしはいつも知ってましたぜ<sup>61</sup>」と、子どもでも知っていると答える。自身の行動をフォークトが話し、役人たちがそれを喜んで聞いている光景は、あたかも子どもたちにメルヒェンを語る様子に重なる。

<sup>59</sup> Ebd., S. 59-60.

<sup>60</sup> Ebd., S. 145.

<sup>61</sup> Ebd..

戯曲の最終場面、フォークトは軍服を着た自身の姿を見て大笑いする。膝も腰も曲がり瘦せた57歳の男が大尉の軍服を着ただけで、周りの人間がやすやすと命令に従ったのである。フォークトの笑いは、ナチ党の制服に目を奪われ、わかりやすいスローガンやポスターに魅かれ、ショーのような集会・演説に扇動されている大衆に向けたツックマイヤーの皮肉の笑いであり、ドイツの現状を読者/観客に顧みて欲しいという願いでもあるにちがいない。

## 終章

権威に弱く、上流階級への憧れを抱く大衆。ドイツ人のこの普遍的気質を、ツックマイヤーが戯曲を通じて風刺していることを論じてきた。ドイツ人の変わらぬ気質に、「人より高い身分にありたい」という思いがあり、そう願うがゆえに人種差別や身分の優劣をする大衆への怒りをツックマイヤーは戯曲に織り交ぜたのであろう。また、ドイツ人が自分たちより劣る民族としてユダヤ人を挙げたことに対する怒りと恐れを、ツックマイヤーは抱いたであろう。その思いを払拭するためのオイレンシュピーゲルの一人が、仕立屋を営むヴォルムザーだったと考えられる。大衆が羨望する軍服を仕立てたのも、フォークトがそれを手に入れる古着屋に軍服を送ったのもヴォルムザーである。そして、弱者が権威主義を逆手に取る事件の一端を担った人物の一人がユダヤ人である点が、ナチ党に陶酔する大衆へ向けたツックマイヤーの警告であったにちがいない。池内は「ヒトラー以下の面々は、『ケベニツクの大尉』によって自分たちが手ひどく笑いものされていることを肌身で感じていたのだらう<sup>62</sup>」と述べている。

ヴァーゲナーは、「1931年、この戯曲は政治的な出来事として、プロイセン的軍服の精神と盲目的服従への批判として受け入れられていた<sup>63</sup>」と記している。ツックマイヤーは、戯曲を通じてドイツの社会状況を風刺して大衆を皮肉の反面、自身の出生からナチ党の危険性をいち早く察して大衆に警告したのである。『ケーベニツクの大尉』が副題「ドイツのメルヒェン」と銘打っているのは、社会状況やドイツ人の気質に向けた風刺と皮肉、反ナチス、ナチ党に傾倒する大衆への警告を組み込んだ作品を検閲から逸らすために、ツックマイヤーが作品をメルヒェンに扮装させようとしたからではないだろうか。

第一次世界大戦から帰還したツックマイヤーはベルリンの文化に影響を受け、潮流に乗るべく時代に合わせた作品を書き続けた。生まれ故郷の風土とその方言を盛り込んだ『楽しいブドウ畑』（1925）、金持ちから奪った金品を貧民に分け与えたライン地方の盗人と、ラインラント地域がフランス軍に占領された史実を題材にした『シンダーハンネス』（1927）、サーカス団を題材に故郷とは何かを問う『カタリーナ・クニー』（1928）を発表すると、それらの戯曲は成功を収め、ツックマイヤーの人気作家としての地位は確立された。その最中にドイツ経済が一変し、ナチ党が台頭したことでドイツ国内での活動が制限され、激しい時代の波に振り回されるようになる。しかし、

<sup>62</sup> 池内（岩波書店、1996）、130頁参照。

<sup>63</sup> Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 68.

ツックマイヤーはナチ党に対抗すべく戯曲を執筆し続けた。それは、1939年にアメリカへ亡命した後も変わることはなかった。ナチ党に対する反旗と傾倒する大衆への警告を秘めた戯曲『ケーペニックの大尉』は、時代に反応する感性と不撓不屈の精神を持ち、そしてナチ党に抗う作家ツックマイヤーを確立した作品といえよう。



《参考資料》 戯曲『ケーペニツックの大尉』 場面

場所：ベルリンとその近郊 時：第一次世界大戦前（第一幕：20世紀への変わり目頃、第二・三幕：第一幕の10年後）

幕	場	場 場 の 内 容	登 場 フォークト	制服の持ち主
第一幕	第1場	ヴェルヘルム二世統治下のドイツ。1900年頃の軍事社会を背景に、ベルリンとその近郊で繰り広げられる。		フォン・シュレックトウ大尉
	第2場	ポツダム軍服仕立屋。大尉が軍服を新調している。	○	
	第3場	ポツダムの警察署。フォークトが旅券を申請するが、管轄外だと追い払われる。	○	
	第4場	ベルリンフリードリヒ通りのカフェ。大尉の暴力事件が起きる。	○	
	第5場	ベルリンにある卸靴工場の人車課。書類がないために追い払われるフォークト。	○	
	第6場	ポツダムの大尉の自宅。退官のため新調した軍服を返す。	○	フォン・シュレックトウ大尉→仕立屋
	第7場	ベルリン北部の簡易宿。フォークトはカレを強盗計画に誘う。	○	仕立屋 →オーベルミュラー
第二幕	第8場	ポツダムの仕立屋。オーベルミュラーが軍服を買いに来る。	○	
	第9場	ゾンネンブルク刑務所。軍隊操典を基に指導する所長。フォークトは軍隊知識を完全に習得。	○	
	第10場	ベルリン郊外リッックスドルフの妹夫婦の居間。フォークトを快く受け入れる。	○	
	第11場	オーベルミュラー夫妻の寝室。きつくなった軍服を無理に着て、破けてしまう。	○	オーベルミュラー →軍服仕立屋
	第12場	リッックスドルフ警察署の住民登録課。フォークトは滞在許可書を申請するが追い払われる。	○	
	第13場	妹夫婦宅。フォークトが少女に「ブレームンの音楽隊」を読み聞かせる。	○	
	第14場	パーティー会場。仕立屋の娘は修繕した軍服を着て近衛兵に扮する。	○	軍服仕立屋 →古着屋
第三幕	第15場	妹夫婦宅。フォークトとホブレヒトが、秩序について論じ合う。	○	
	第16場	ベルリンのクラカウ人が営む古着店。フォークトは着古された大尉の軍服を購入。	○	
	第17場	公園のベンチに腰を掛けているフォークトは、過ぎる人々の話を聞いている。	○	
	第18場	シュレジア駅。軍服に着替えたフォークトは小隊を連れてケーペニツックへ向かう。	○	
	第19場	ケーペニツック市長室。市長を逮捕し、金庫を開けさせる。役人は市長の命に従わない。	○	
	第20場	ケーペニツック市長室。市長の妻は大尉を疑うが、軍服と銃の前では服従せざるを得ない。	○	
	第21場	ベルリンフリードリヒ通りの居酒屋。軍服を脱いだフォークトが犯人だと誰も思わない。ベルリン警視庁の尋問室。事件の経緯を語るフォークトは自身の軍服姿を見て大笑いする。	○	古着屋 →フォークト